「助けてください」――この文字の重さ

～建設現場という閉鎖されたコミュニティーで起きたこととは～

千葉土建中央常任執行委員　海老原（えびはら） 秀典（ひでのり）

2018年の夏、「助けてください」と仲間の悲痛な叫びが千葉土建に寄せられた。

その夏は災害的猛暑とも言われ、気象庁は異例の会見を開き「40度前後の暑さはこれまで経験したことのない、命に危険があるような暑さ」「ひとつの災害と認識している」と伝えた。

そんな中、千葉土建の組合員は意を決し、大成（たいせい）建設が元請けの超高層ビル建設計画「東京・丸（まる）の内（うち）3 - 2計画」現場の労働環境の劣悪さを訴えた。

「冷房のない休憩所は40度を超え、弁当が腐ってしまう」「水を買えば元請けの社員に写真を撮られ、翌日の朝礼で『さぼっている』と数千人の前でさらし者にされる」「元請けに工程の件で助言をすれば、『文句を言う奴は出ていけ。出入り禁止だ』と胸ぐらをつかまれる」。

建設現場という閉ざされたコミュニティーの中で、現場作業員らは言いたいことが言えず、ただただ、我慢するしかなかった。

圧倒的権力を使う元請け

建設現場は重層下請け構造になっており、元請けの管理下で下請け・再下請け・労働者らが建築物を完成させようとの一心で働いています。多くの現場は元請けの適切な指示によって工事は順調に進み、労働安全衛生に関しても適切に履行されています。

しかし、スーパーゼネコンである大成建設が元請けの東京・丸の内3 - 2計画現場は、まるで現代版「蟹工船」のようでした。元請けは建設現場という閉鎖されたコミュニティーの中で、下請け事業所や再下請け事業所、そして労働者に至るまで徹底的にパワハラを行い、作業員らが何も言えなくなるような状況を作り出したのです。

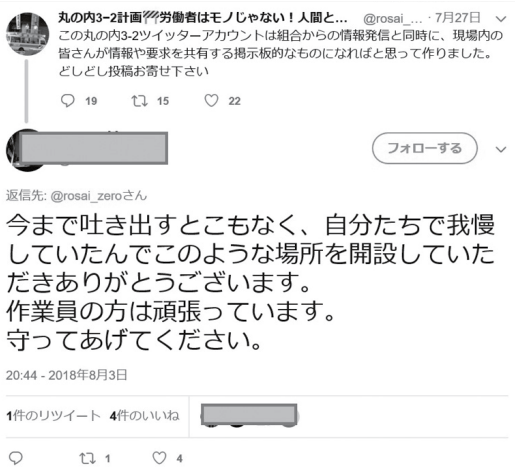
結果、冒頭の通り、作業員らは劣悪な労働環境にあっても、ただ我慢するしかなかったのです。

しかし、千葉土建組合員はこの状況は普通ではないという思いから千葉土建に相談をしました。私たちは「命に関わる問題」と捉え、首都圏の建設組合とともに、現場包囲行動を敢行しました。

2018年7月13日の第1回目の現場包囲行動は作業員らが仕事を終えるであろう夕方に行いました。現場から出てくる作業員らは堰を切ったように「この現場はひどすぎる」「この暑さなのに飲み物が買えない」「作業場所はサウナ状態だ」などと訴え、宣伝隊が作業員らに取り囲まれる状況となりました。

SNSは省庁をも動かす力に

元請けである大成建設は作業員らに組合との接触を禁じました。現場付近には元請け社員を配置



Twitter 開設に感謝の声が寄せられた

し、組合と話している労働者らを写真撮影するなど、作業員への圧力をかけたことから、現場包囲行動で組合の問いかけに答える作業員は激減しました。

私たちは、「自由にモノが言える環境を作らなければならない」そして「個人が特定されない状況を合わせ持たなくてはならない」と考え、Twitter（ツイッター）を開設しました。その拡散のために名刺サイズの宣伝ツールを現場で配布した結果、わずか 3 日間でフォロワーが 300 人を超えました。

Twitter は個人が特定される可能性も低く、同じ境遇にある仲間同士がつながる手段として最適だと感じています。Twitter を通じて、現場の仲間から随時、現場状況やパワハラの実態、労働環境の劣悪さが報告されるようになりました。休憩所がすし詰めの様子や、労働者 3000 人に対してトイレの数が足りない状態、骨折しても労災申請できない現状などを自ら撮影し投稿、画像まで共有されるなどしています。そこには元請けからの凄まじいパワハラから「助けてください」という切実な訴えさえあったのです。

Twitter で現場実態が明らかになったことから、国交省本省や厚労省本省へ改善要請を行い、本省を動かすことができました。これは現場の実態や、切実な仲間の声を突き付けることができたからです。足りないながらも現場環境は改善され、現場の仲間からは「組合が来なければ死人が出ていた」や「飲み物が買えるようになった」などのツイートも増えていったのです。

建設現場で配布したカード（左）、YouTube の QR コード

メディアが取り上げないなら YouTube で

過酷な建設現場の状況を各メディアにも発信し、NHK も現地取材に来ました。しかし、事件性が薄いことから取り上げられることはありませんでした。であるなら、組合が発信していこうと映像を制作し、YouTube（ユーチューブ）へ投稿しました。これには、首都圏の建設組合から大きな反響を得ただけでなく、全国の建設組合からも「これこそが労働組合だ」という応援や励ましの声が寄せられました。

Twitter や YouTube には二つの機能があります。一つは組合に対しての情報提供、もう一つは現場の人たちと、匿名であるにせよ情報を共有し、交流できるということです。建設現場という閉ざされたコミュニティーの中で、元請けという圧倒的な権力を持つ脅威の下、労働者である建設職人たちが互いに励ましあえたからこそ、一つの建物を完成させるという共通目的に向かうことができたのではないでしょうか。

多くの建設現場では大なり小なり必ず問題は起きています。「それは仕方のないこと」と個人の「ものさし」で計っていたとしても、実は大きな問題なのかもしれません。Twitter は労働者個人の“ものさし”（感性）が重なって、多くの労働者が現場で感じている“ものさし”（想い）を可視化する役割を担っていくと感じています。

首都圏の建設労働組合は SNS を情報共有の場とするとともに、SNS を通じて事実と仲間の声、そして運動の成果を今後も配信していきます。

編集部：本連載は今回で一旦終了します。ご愛読ありがとうございました。